

受容性と志向性：志向性の哲学史における フッサールの功績は何処にあるのかⁱ

富山豊

序：志向性の哲学史における受容性の系譜

布伦ターノが強調していたように、意識ないし心的作用が「何かについてのものである」という志向性をもつという事実の認識はそれ自体ではそれほど目新しいものではない。布伦ターノがその概念の再導入にあたって自ら参照していた中世哲学やアリストテレスの伝統はもちろん、近世哲学の議論文脈においても、意識の志向性は観念のもつふたつのレアリタスの区別という仕方でデカルトによって明確に主題化されていたし、また自らの形而上学の構築にあたって表象能力を本性とする実体をその世界観の中核に置いたライプニッツの体系は、志向性の哲学史において無視し得ないものである。ライプニッツの影響はヴォルフ学派を通じてその後のドイツ哲学史に広くその力を及ぼしているし、またラインホルトの意識律に象徴される主観と客観の謎めいた関係を巡る主題的な問題意識は、形を変えていくつかの仕方でフィヒテの知識学の中心的課題のうちに伏在し、またとりわけ『精神現象学』において顕在的な仕方でヘーゲルにまで流れ込んでいる。では、このような状況下で、『論理学研究』以降のフッサールが改めて志向性の分析を自らの「現象学」の中心課題として掲げたとき、その独自の功績はいったいどこにあるのか。

本稿は、この問題設定を背景として、村田論文と中畑論文に共通するある「偏り」を検討対象としたい。それは、哲学史的にはアリストテレスの知覚論における形相の受容というモチーフの継承に、事象的には知覚志向性優位の分析という仕方で志向性理解の様式にそれぞれ強く関わっており、また間接的な仕方で、言語の志向性の位置づけという問題にも関わっている。この事情を明らかにするために、まず両論文が共通に参照しているアリストテレスの知覚論から始めて、志向性の哲学史における「受容性」ないし「因果性」の系譜を確認する。続いて、この系譜に属する志向性理解の決定的な突破口として、ライプニッツの表出概念を位置づける。その上で、フッサールの（とりわけ『論理学研究』に代表される初期の）志向性理論

がこの歴史的背景の中でどのような特徴をもつものであるのかを確認し、村田論文のフッサール解釈を検討する。さらに、この視点から中畑論文をも参照しつつ、意識の志向性と言語の志向性の優先性を巡る議論に光を当ててみたい。

村田論文と中畑論文が共通して指摘しているように、アリストテレスの知覚論において我々の心が知覚対象を認識するのは、我々はその対象から質料を受け取ることなしに形相を受け取ることによってである。この関係を村田論文は「対象がそれ固有の仕方で見れる」ないし「対象を現象へともたらず」ような関係として記述しているし、また中畑論文はこの関係を「因果的であるとともに」、「志向的」なものと特徴づけている。こうした枠組みにおいては、(少なくとも知覚の)対象が我々の意識に対して現出し、対象となり、かくしてその対象をまさに作用がそれについてのものであるところの対象とするという意味においてそこに志向性の構造が成立するのは、その対象自身が己の形相を何らかの仕方(村田論文が指摘するように適切な「媒体」の働きを通じて)我々の意識に対して与えてくることによってである。そして、この関係はおそらく中畑論文が指摘するようにある種の「因果的」な働きであると看做すことが自然であろう。じっさい、ライプニッツの有名な無窓性の議論の眼目は、可感的形相の因果的な受容というまさにこの描像を拒否することにある。また、可感的形相のみならず、中世の多くの理論において可知的形相もまた想像力のうちに蓄えられた可感的形相からの抽象という仕方を取り出されるものであったことを考えれば、知覚に限らず一般に志向性の成立を因果的に説明しようとする傾向をこの伝統のうちに見て取ることも出来るであろう。この傾向は、英国古典経験論およびフランスにおけるその継承、とりわけヒュームの印象論においてその支配力を認めることが出来るし、デカルトの観念論においても観念の客象的レアリタスに関する因果性原理という仕方で見出すことが出来る。また、デカルトの場合と同様にその受容性の内実は極めて限定的なものではあるけれども、現象の成立に関して感性における受容性の契機を決して放棄しようとしなかったカントの超越論的観念論の理説においても、それ自体として存在する対象からのある種の因果的作用による志向性の成立という志向性理解の伝統の痕跡を見届けることが出来る。現代においてはこの傾向はもちろん単純に支配的であるとは到底言えないが、しかしながら数学的真理の説明に関するあの有名なジレンマをベナセラフが定式化したとき、意味論におけるタルスキ的説明と並んでその両刃を構成していたのが知覚因果説であったことからその影響力の大きさと根深さを窺い知ることが出来る。

それほどまでに根深くまた根強い動向として因果的な志向性理解を志向性の哲学史のうちに位置づけるとき、この趨勢の決定的な離反者として際立ってくるのがライプニッツである。ライプニッツの有名なモナドの無窓性の議論は、モナドが何か

を表象することの説明としてその対象から可感的形相のような何らかのものの因果的な受容による説明を拒否するためのものであったと言われている。受容のための窓を排除することで、志向性の因果的説明を放棄したライプニッツのモナドが世界を表象することが出来るのは、彼の特異な表出概念の故である。いわゆる「構造的類比」によるライプニッツの表出概念は、何らかの関数的な対応関係によって一方の構造が他方の構造に翻訳出来るとき、片方の構造を調べれば他方の構造を知ることが出来るような対応関係を見出すことが出来るとき、一方が他方を表出すると言う。このような表出理解においては、因果性はなんら本質的な役割を果たさない。事実として対応が成り立っていさえすれば、その成立の由来は問われないからである。このことが印象的な仕方と顕在化しているのが、いわゆる「予定調和」の議論であると言うことが出来る。かくして、ライプニッツの観念論ないしモナド論において世界を表象することの志向性の説明様式は、因果的説明を明示的に廃棄していわば数学的・論理的な意味論の説明を明確に採用したという点において、アリストテレスから少なくともカントまでを貫く志向性の哲学史の主潮流に対して決定的な離反を示しているのである。

では、この事情を背景として改めてフッサールの志向性理論を視界に収めたとき、志向性の成立に関するその説明様式はどのような位置を占めるものとして現れてくるだろうか。周知のように、フッサールの志向性概念は彼が師のブレンターノから継承したものである。中畑論文、および著書『魂の変容』で指摘されているように、ブレンターノの志向性概念は彼のアリストテレス解釈をその重要な源泉とするものであった。以上の背景の下で、フッサールの志向性理論を歴史的系譜の中に位置づけようとするとき、アリストテレスからブレンターノを経由してフッサールへ、という直線を引きたくなる誘惑は自然なものであろう。だが、志向性の哲学史においてフッサールをアリストテレス以来の因果的受容モデルの系譜を継承するものとして位置づけることは果たして適切なのだろうか。少なくとも『論理学研究』において確立された初期志向性理論に関する限り、この問いには否定的に答えるべきであるように思われる。

第一に、『論理学研究』における「現象学」的な分析態度が、因果的説明を許さないという理由が挙げられる。対象のレアルな実在性を前提せずに意識における作用の記述的性格としての志向性の分析を課題とした『論理学研究』の「現象学」的志向性分析にとって、対象のレアルな現前を前提し、そこからの因果的な働きかけを何らかの仕方と我々が「受容」することによって当該対象への志向性の成立を説明するような理論は採ることが出来ない。

第二に、『論理学研究』における志向的对象の分析範囲が、因果的説明の可能な範囲を超えるという理由が挙げられる。『論理学研究』のフッサールが「対象」として

分析の俎上に乗せている存在者は、物体のようなレアルなものに限られず、「意味」や「数学的対象」のようなイデアールなものも含まれる。こうした対象から、何らかの因果的な経路で「形相」ないしそれに類するものを「受容」というモデルに、果たしてどれだけの実質を与えることが出来るであろうか。イデアリテートへ向かう志向性の説明にはレアリテートに向かう説明とはまったく異質な説明様式を要するのだ、という回答も可能かもしれないが、少なくとも『論理学研究』におけるフッサール自身は志向性の説明様式の一様性を強く要求していると看做すべき理由がある。したがって、少なくとも志向性の一般理論において志向性そのものの成立を説明する機構としては、対象からの因果的な働きかけの受容によってその対象への志向的關係が確保されるという説明様式はやはり採ることが出来ない。

第三に、『論理学研究』の志向性理論が、作用の志向的な記述性格の分析においてじっさいに（ある限定された仕方においてであれいわばライプニッツ的とも言える）論理学的意味論的な規準を用いた志向性分析を行っているという理由を挙げることが出来る。彼の分析は、まさに「何を調べればその対象についての諸判断のネットワークの意味論的振る舞い（端的に言えば真偽）を説明することが出来るのか」ということに定位した志向的对象の特定を中核とする志向性分析であり、この点において、志向性の哲学史におけるフッサール初期志向性理論の本来の位置は、アリストテレスの末裔やヒュームの子孫やカントの後継というよりはむしろ、ライプニッツの正嫡に他ならない。そうであるならば、アリストテレス的伝統の継承に注目した志向性概念の解明を中心に据えることは、フッサールの『論理学研究』における洞察のうちに含まれていたこの伝統からのライプニッツ的離反を軽視する点で、フッサール解釈としても純粹に事象的な志向性概念の解明戦略としても、ある「偏り」があると云わざるを得ないだろう。では、そのフッサールの初期志向性理論の内実はいかなるものであったか。節を改めて検討しよう。

第1節：フッサール初期志向性理論における対象概念

確かにフッサールは、『論理学研究』における自らの志向性概念の導入をブレンターノへの言及によって開始している。

我々が優先的に取り上げるふたつの規定のうちの一方は、心的現象ないし作用の本質を直接的に示している。その本質は任意のどの例においても明白に現れてくる。知覚においては何か知覚され、像表象においては何か像的に表象され、言表においては何か言表され、愛においては何か愛され、憎しみにおいては何か憎まれ、熱望においては何か熱望される、等々。

(XIX/1, p. 380)

知覚、例えば視覚は当然ながら何かを眼前にしながらそれを知覚しているのである。うし、想像もまた何かを心中に思い描きながらそれを想像している。特に何を知覚しているわけでもないがただ知覚することだけをしているということは不可能であるし、何かを想像しているわけではないがただ想像はしているということも意味を成さない。こうした仕方でのパッセージを読み解こうとする際の危険な誘惑のひとつは、ここでの志向性の本質を何らかの心的な「内在的対象」の所有に見出したり、あるいは外的な対象への何らかのいわば「注意の視線」の方向づけに見出そうとする誘惑である。

だが、心的な「内在的対象」の所有に志向性の本質を見る議論に対しては、フッサールは初期から明確に反対の立場を採っている。『論理学研究』に先立つ 1894 年の「志向的対象」論文においてフッサールは、対象を表象するということをして「それに対応する何らかの心的な模像をもつこと」(Schumann, 1991, pp. 143) によって説明しようとする立場を明白に斥けている。また、この態度が『論理学研究』に大成される初期志向性理論において一貫したものであったことは、以下のテキストから確認出来る。

一方の「単に内在的」もしくは「志向的」諸対象と、他方の、場合によってはそれらに対応する「現実的」かつ「超越的」対象とのあいだに、そもそも何らかの実的区別を行うならば、それは重大な誤謬である。(XIX/1, pp. 438–439, 第二版)

また、知覚においてとりわけ誘惑的であるように、外的な超越的対象とは別の心的内在的対象を所有しているのではないとしても、その注意の「視線」がどこに向いているのかによって志向性の「方向性」を説明しようとする傾向もまた自然ではある。こうした考え方についてはフッサール自身がじっさいに展開した志向性理論を以ってそれに応じることが出来るが、フッサールのテキストをいったん離れて一般的に考察するならば、以下のように注意を促しておくことは出来よう。

例えば、「机の上に置かれているグラスの中の液体は水だ」という判断を考えよう。この作用において、判断の主語として問題になっている対象、より正確に言えば、判断作用全体の部分作用である「机の上に置かれているグラスの中の液体」という表象の対象は、机でもグラスでもなく、液体である。だが、このことは何によって担保されるのだろうか。その理由は、一般には知覚や想像の視野において液体が机やグラスよりも明晰で生き生きとしているからでもなければ視野の中心にあるからでもない。想像も知覚も伴わずにそのような判断を遂行することは可能であるし、もし知覚を伴いながら判断する場合であっても、机やグラスを見ずに液体だけを見

ることも不可能であろう。机の上にあるグラスの中の液体を見るとき、液体だけがとくに強く鮮明な印象で心に迫ってくるという必然性もない。さらに言えば、その同じ視覚状況から視線を動かさずに「このグラスは熱湯を注げば割れるだろう」という判断や、「この机は一年前に買ったものだ」という判断に移行することも可能であろう。つまり、判断が何についての判断であるか、そこで問題になっている案件が何であるか、すなわち作用の対象が何であるかは、そうした視線の向きや注意の強さ、印象の鮮明さによって担保されているわけではないのである。

では、初期フッサールの志向性理論において志向性の成立を担保するものは何なのだろうか。このことを考える上で重要なのは、「真理」の概念との連関である。伝統的に、真理と存在、あるいは真理と対象の結びつきは深く、強い。存在のじっさいの在り様と言明との一致として真理を説明する対応説的真理観はその由緒ある伝統をアリストテレスの文言にまで遡って誇示するのが常であるし、存在と知性、ないし事物と知性の一致において理解された超越範疇としての真理の概念は、中世哲学の長きに亘る伝統における中心概念のひとつである。そして初期フッサールの対象概念もまた、真理の概念と密接な結びつきのうちにある。

存在ということで「レアルな」存在だけを、対象ということでレアルな対象だけを理解することに慣れた人にとっては、普遍の対象とかその存在というような言い方は、根本的にまちがっているように思われるであろう。それに反して、そのような言い方をまずはある判断の、すなわち数や命題や幾何学的形象などについて下された判断の妥当性に対する指標として単純に受け取り、そしてその上で、他の場合と同様この場合にも、それについて判断が下されるものに対しては、判断の妥当性の相関者として、「真に存在する対象」という名称が明証的な仕方で与えられなければならないのではないかと自問する人にとっては、ここには何の障害も見出されないであろう。(XIX/1, p. 106, 第二版)

フッサールの初期志向性理論において判断の対象、より一般に作用の対象とは、その真理性の相関者という形で分析されるものである。だが、対象が真理の相関者であるとは具体的にはいかなることであろうか。

フッサールにおいて対象とは、判断が成り立つところのそれ、述定の担い手、という形で判断の真理と相関的に考えられている。そして、具体的な表現に関してフッサールが実際に行っている志向性分析の実例を見るならば、判断の文脈における振る舞い方を規準として表現の对象的関係が分析されていることは明らかである。一例を挙げよう。こうした述語づけによる同一性判定は、『論理学研究』に先立つ1896年の論理学講義にも既にはっきりと現れている。

まず「すべての A」という形式からはじめよう。それはクラス表象と近い類縁関係にあるが、しかし後者のような集合的な機能ではなく分配的な機能をもつのである。「人間のクラスは、道徳的に非道な存在者のクラスと交わる」と我々がいうとき、その述語はクラス全体に関係するのであって、そのクラスの中の各々の個別者に関係するのではない。個々の人間は、道徳的に非道な存在者のクラスと交わりはしない。しかし我々が「すべての人間」というとき、たとえば「すべての人間は死すものである」というとき、我々は確かにそのクラスを表象するが、しかし述語はそのクラスの各々の個別者に関係するのである。(Mat. I, p. 99)

つまり、すべての人間という表象は、人間のクラスを対象としてもつ表象ではない。この対象性のちがいを、フッサールの不用意な叙述が時としてそのような印象を与えてしまうように、「すべての人間」と述べるときと「人間のクラス」と述べるときにイメージされるものの内省によって判定しようとすることは明らかに不毛である。ここで述べられているように、「すべての人間は死すものである」という判断が真である（あるいは真と看做されている）のに対して、「人間のクラスは死すものである」という判断が偽であるということから、ふたつの表象の判断における振る舞いの相違、したがって表象の対象的方向の相違は明らかなのである。このように、フッサールは表象、ないし作用の対象が何であって何でないかということ进行分析する際に、判断文脈におけるその表象の意味論的振る舞い、すなわち判断の真偽への寄与の仕方、とりわけ述定しうる述語の差異、ということの主たる規準としているのである。

このことは、『論理学研究』のテキストにおいても十分に確認出来る。例えば、判断の対象として主語対象と事態のいずれを考えるべきかを議論する文脈で、フッサールは以下のように述べている。

「ナイフが机の上にある」という文においては、ナイフは確かに、それに関して (über) 判断され、あるいはそれについて (von) 言表されるところの対象である。しかしそれにもかかわらず、ナイフは第一次的な対象ではない。すなわちその判断の完全な対象ではなく、単に判断の主語の対象であるに過ぎない。判断全体に完全無欠な対象として対応しているのは判断された事態であり、そしてこの同一の事態が単なる表象においては表象され、願望においては願望され、質問においては質問され、懐疑においては疑われているのである。後者についていえば、先ほどの判断に相当する「ナイフは机の上にあるはずだ」という願望は、確かにナイフに関するものではあるが、しかしそこで私が望んでいるのはナイフではなく、ナイフが机の上にあること、そ

うなっていることである。そしてもちろんこの事態はそれについての判断とも、まして判断の表象とも混同されてはならない。——つまり私が望んでいるのは判断や表象ではないからである。(XIX/1, p. 416)

ここで用いられている規準は、ある判断の「対象」が何であるかを定めるのは、その判断に述定出来る述語が何であるのかを考えることによって、すなわち判断に対するより高次の判断の文脈における意味論的振る舞いによってであるというものである。表象や対象の同一性を『論理学研究』のフッサールが本質的に述定可能性から考えているというこの論点は、第五研究の論述からも確認することができる。同じ統握意味、同じ質料、本質的に同じ表象をもつとはどういうことかという点について、フッサールは以下のように回答する。

そうした本質的な同一性の意味がもっとも明晰に際立つのは、より高次の諸作用に対する基づけとしての表象の機能について考える場合である。というのも我々は、この本質同一性を以下のように同値に特徴づけることができるからである。すなわち、ふたつの表象のうちのそれぞれ一方に基づいて、しかも純粋にそれだけで受け取ったとしても（すなわち分析的に）、表象された事象について正確に同じことが言表されることができ、他のことは言表されないならば、そのときふたつの表象は本質的に同じものである。(XIX/1, pp. 432-433)

かくして、フッサールが基本的に判断文脈における意味論的振る舞い、つまり真偽との関わりということにおいて作用の対象への関わり、すなわち志向性の成立を考えていたことは明らかである。このことを踏まえて、次節では中畑論文と村田論文の議論のどこが偏っているのかを論じたい。

第2節：志向性は受容性に基づくか

村田論文が適切に指摘しているように、フッサールの志向性理論にはここまで言及して来なかったもうひとつの重要な論点がある。それは、対象概念と密接に結びついた真理の概念はさらに充実化の概念、すなわち直観（範例的には知覚）における正当化の概念によってその実質を与えられるという点である。

確かに、フッサールの真理概念は充実化の概念と結びついており、また知覚においてこそ対象「それ自体」が与えられるということをフッサールはしばしば強調している。だが、このことは必ずしも現前する対象からの知覚による何らかの受容が志向性を成立させると考えるべきことを意味しない。本節でこのことを論じておき

たい。

フッサールは、確かに知覚による充実化において対象そのものが与えられると主張し、またそこにおいて確立される真理の概念と対象の概念が緊密に関連していることは前節で述べた。しかし、このことは知覚において初めて志向性の関係が確立されることを意味しない。再び、「机の上に置かれているグラスの中の液体は水だ」という判断を考えよう。この作用において、判断の主語として問題になっている対象は机でもグラスでもなく、液体である。机やグラスが対象でないのは、それらの材質をいくら調べても当該判断の真理値決定に何の寄与も果たさないからであり、水であるかどうかが問題になっているもの、その判断においてそれについて問題にされている対象は、机でもグラスでもないのである。当該判断は、机やグラスを調べることによってではなく、まさにその液体に関する様々な作用によって、たとえばよく色を観察したり臭いを嗅いだり味を見たりといった知覚作用によって、確証されたり反証されたりする。刺激臭など、その液体についての知覚によって判断が反証され、偽とされることがありうるのは、その判断が当初から一貫して液体についてのものだったからである。そうでなければ、液体についての他の諸作用によって真となったり偽となったりはしない。つまり、作用にとって何が対象であるかは、真偽へのコミットメントという文脈においてそれが何について問題にする作用であるか、何によってそれが充実され、何によっては充実されないか、という点によって決まるのである。もうひとつ例を挙げよう。たとえば、ある人が「隣の部屋に花瓶があるはずだ」と発話し、それを聞いた別の人が隣の部屋に行ってじっさいに花瓶を知覚したとしよう。このとき、知覚者の証言によって発話者の発言は裏付けられる。彼の発言は真であったのである。だが、何故か。発話の時点では花瓶を誰も知覚していないし、そもそも発話者は花瓶を知覚しに行っていない。したがって、発話者が自分の発言を有意味に理解しつつ発話している時点では、対象は不在であったといってよい。しかし、もし発話者の作用がいかなる対象にも向かっていなかったり、あるいは彼の心的表象や意味にしか向かっていないならば、知覚者の証言によって彼の発話が確証されることはありえない。というのも、知覚者は発話者の理解した意味を確認しに隣の部屋に行ったわけではないからである。知覚者が確認したのは隣の部屋に実在する花瓶であり、発話者の発言もそれについてのものである。発話者の発言が花瓶についてのものであったからこそ、その発言は知覚によって現実の花瓶が与えられることで確証されうるのである。発言が対象ではなく意味につものであったならば、その発言が確証されるのは意味を分析することによってであり、花瓶というまったく異なる対象の在り方には依らないはずである。それゆえ、対象がいまだ不在の場で発言されたり解釈された命題であれ、それを理解する意味作用が対象として向かっているのは対象がじっさいに与えられる知覚等の場合

と同一の対象でなければならないのであり、そうでなければ事後的な確証や反証という出来事、すなわちフッサールが充実という名称の下で分析している諸事象の理解はまったく不可能になってしまうのである。このような意味で、対象とは、判断がそれについて下され、その判断がそれについて真であるところの真理の相関者である。そうであるならば、判断の志向性は、知覚によって対象の現実的な現前が確認される以前に成立していなければならないし、したがって実在の対象から何らかの因果的経路で何らかの「受容」が為される以前にその関係は成立していなければならない。とするならば、志向性の成立を担保するのは、対象から何かを因果的に受け取る受容性の能力ではなく、むしろある経験のある判断の確証ないし反証と看做したり、ある判断のある判断の帰結と看做したり、ある判断とある判断を不整合であると看做したりといった、それらの正当化関係によって経験の諸作用を結びつける我々の振る舞いのネットワークの方である。もちろん、ここにおいて知覚は特権的な位置をもつ。だがそれは、そこで何かを受容することによって初めて対象との関係を、すなわち志向性を成立させるような特権性ではない。それはむしろ、ある経験を真正の知覚と看做すならばそれは対応する判断の確証と看做さざるを得ず、逆にその判断と矛盾する信念を維持するのであればそれを真正の知覚として遇することを何らかの理由で却下しなければならないという、正当化ネットワークにおける位置の特権性である。

そして、このライブニッツ - フッサールの志向性理解の方向は、「心の志向性」対「言語の志向性」の優先性争いという周知のテーマに対して、対立そのものを解消する方向性を示唆しているように思われる。というのも、『論理学研究』が洞察したような志向性の働きは、現前する眼の前の対象から心が単純に何かを受容する、といった仕方で成立するものではなく、諸判断やそれに類する諸作用の複雑なネットワークの意味論的振る舞いという高度に「言語化された」場面で成立しているものであり、こうした組織化された仕方で我々が言語を使用し、主張や正当化の振る舞いをそれに合わせた仕方でじっさいに行っているということにおいて、言語の志向性もまた成立してくるからである。ウィトゲンシュタインに由来し、ダメットが精力的に展開した意味の使用説とはそのような洞察に他ならない。そうであるならば、我々がある組織化された仕方で振る舞う様式のうちに、心の志向性と言語の志向性とはいわば「同時に」成立してくるのではないだろうか。少なくとも、言語のこうした使用と解釈の振る舞い以前に物体としての言語記号がそれ自体として志向性を胎胎していると考えすることは出来ない（この点は中畑論文が適切に指摘しておられた通りである）し、また、心の志向性が先に完成しており、それをいわば言語記号に「貼り付ける」ような仕方でいわゆる「意味付与」が成立すると考えることも適切ではないように思われる。少なくとも、たとえ心が本質的に志向性をもつも

のだとしても、それはいわば単一の孤立した作用ないし体験のうちに心像や注意の視線の方向性といった仕方で何か即物的に内在しているものではなく、それがどのような志向性であるのかは経験連関におけるその振る舞いの位置価によって切り出されてくるものだからである。したがって、心や言語が何か特権的な存在者として即物的に志向性という性質を内在させているというような、そのような単純化された二者択一で考えてしまうことからの重要な突破口をフッサールは（そして触れることが出来なかったがおそらくはハイデガーも）示してくれているのではないだろうか。ブレンターノの志向性概念の由来をアリストテレスに遡って精査した後で、著書『魂の変容』および中畑論文において示唆されているもうひとつの方向性とはこれに親近的な発想であるように感じられる。志向性の哲学史においてフッサールが有している固有の洞察を活かすためには、この方向にフッサールの志向性概念を正しく位置づけて精査することが必要であるように思われるⁱⁱ。

参考文献

- Karl Schuhmann, "Husserls Abhandlung "Intentionale Gegenstände" Edition der ursprünglichen Druckfassung", Brentano Studien, 3, 1991, pp. 137–176
- 富山豊, 「フッサール初期志向性理論における「志向的对象」の位置」, 『フッサール研究』7, 2009a
- 富山豊, 「初期フッサールにおける事態論」, 『論集』27, 2009b
- 富山豊, 「初期・中期フッサールにおける意味概念の動揺」, 『現象学年報』26, 2010b
- 富山豊, 「フッサール『論理学研究』における「対象」の超越性について」, 『論集』29, 2011
- 富山豊, 「フッサール初期志向性理論はどの程度まで「実在論」か」, 『哲学雑誌』第128巻, 第800号, 2013
- 中畑正志, 『魂の変容』, 岩波書店, 2011

ⁱ 本稿は文部科学省科学研究費（特別研究員奨励費）の交付を受けて行った研究成果の一部である。また、本稿は2013年3月23日のフッサール研究会シンポジウム「志向性の哲学と現象学」における特定質問者としての質問原稿を基にしたものであり、本稿で検討されている中畑論文および村田論文とは、その際の村田純一氏および中畑正志氏原稿を指している。それぞれ『フッサール研究』誌上に掲載予定のはずであるが、内容の変更があり得るかもしれないこと、および中畑論文の理解のために著書『魂の変容』（中畑, 2011）を援用したことをお断りしておく。

ⁱⁱ フッサールの初期志向性理論に関する本稿での議論は、これまでの拙稿における解釈作業に基づいたものである。詳細については、富山, 2009a; 2009b; 2010; 2013 を参照。